

六十里越街道を

愛犬「とがち」と行く

2014年10月～2015年10月



田麦俣の時計台

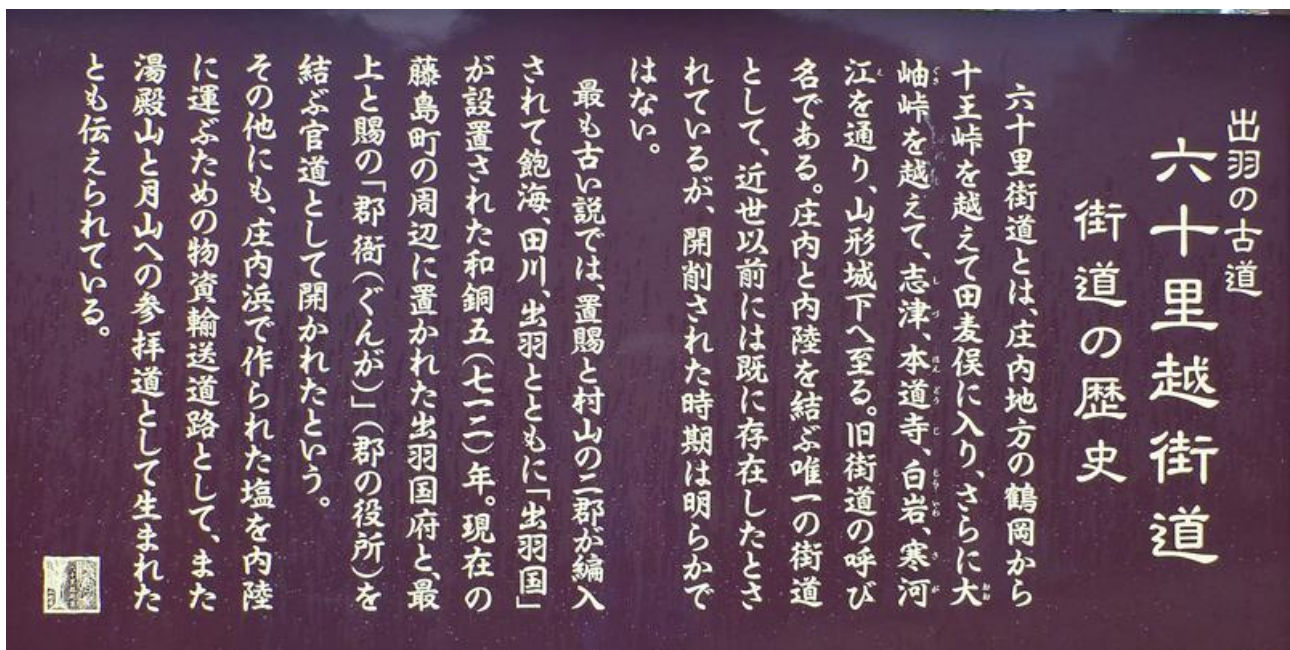
六十里越街道を初めて知ったのは、大学1年の時だったが、その時の六十里越街道は今で言う旧112号線の別名だった。その後、それとは別に古道の六十里越街道があることを知り、いつか歩いて見たいという思いがつのっていたが、延び延びになっていた。

犬を飼うようになり、毎日の散歩をしながら、大自然の中を歩かせたいという気持ちもあり、犬を連れての六十里越街道踏破を計画した。西の熊野、東の湯殿山と言われるくらい800年頃には行き交う人々で賑わっていたそうだが、1200年前の人達が歩いた道を歩くことにより、当時の人達が何を見て、何を考えて、どのような生活をしていたかを考える糸口になればと思った。

昨年、2泊3日で六十里越街道を踏破する予定で出発したが、二日目に雨が降ってきたので田麦俣で中断した。今年の10月に、続きの田麦俣から志津温泉までを1泊2日で歩き、2年がかりで全行程を歩くことができたので写真を中心にまとめてみた。

2014年10月9日～10日

鶴岡市松根～田麦俣



出発地点の松根の八幡神社



松根の庚申塔

普段の散歩とは違う、並々ならぬ気配を感じた「とかち」は反対方向を向いて歩こうとしない。八幡神社の裏手からいきなり古い庚申塔の出迎えを受け、1200年前の世界に入った。しばらくは林道をひたすら登る事になったが、「とかち」は野生に目覚めたのか、興奮状態になりパワー全開となって走り回っている。これでは最後まで体力が持つのか心配になった。



カエデの巨木と杉の巨木



長い林道歩きを終えると、いかにも古道の趣に溢れた巨木の森の中に入った。「もののけ姫」の中の「コダマ」が現れそうな雰囲気だ。10月なのに直射日光が当たるとかなり暑く、長袖を脱いだ。登り始めて2時間半、この頃から「とかち」は暑さのためか、薄気味悪い山中の雰囲気が怖いのか、立ち止まることが多くなった。そのたび、休憩をしながらおやつをあげて励ました。



この日の第一の難所の十王峠を何とか越えた。当時、ここに茶屋があったとは信じがたい。



峠より月山の眺望。汗を流して峠を越えた人々は、この月山のパノラマに疲れを癒やされたことだろうと思うと古の人達が身近に感じられた。



峠を少し下りたところに「イタヤ清水」が湧いており、お昼を食べながら休憩をした。この水は冷たく美味しく、「とかち」も気持ちよさそうに飲んでた。この場所は木陰で爽やかな風も通り、昼休みにはもってこいの場所だった。

ここから注連寺までの下り坂も古道の雰囲気溢れた山道だったが、その後、大日坊までは集落の中の舗装道路を延々と歩くことになり、折からの季節外れの暑さが疲れを倍増させていった。



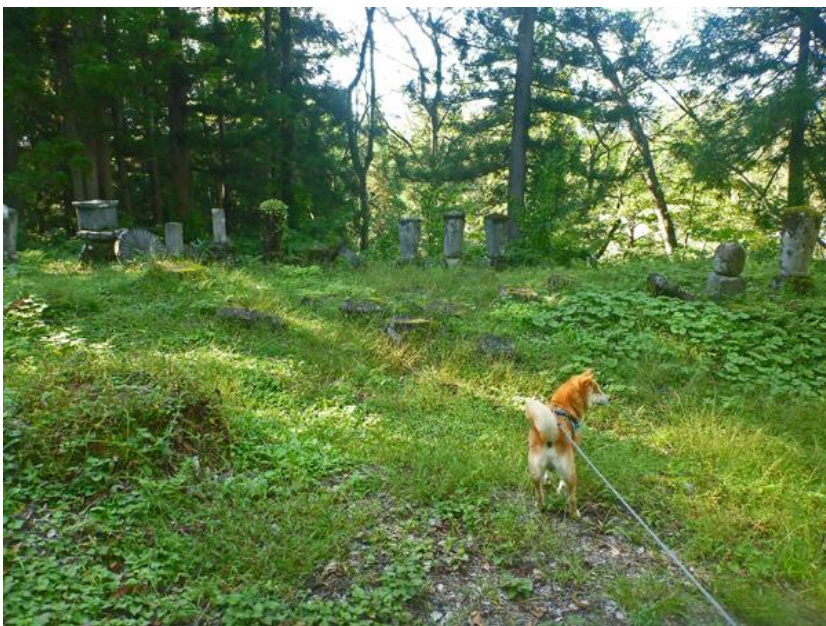
注連寺



大日坊



日本一の庚申塔



旧大日坊跡



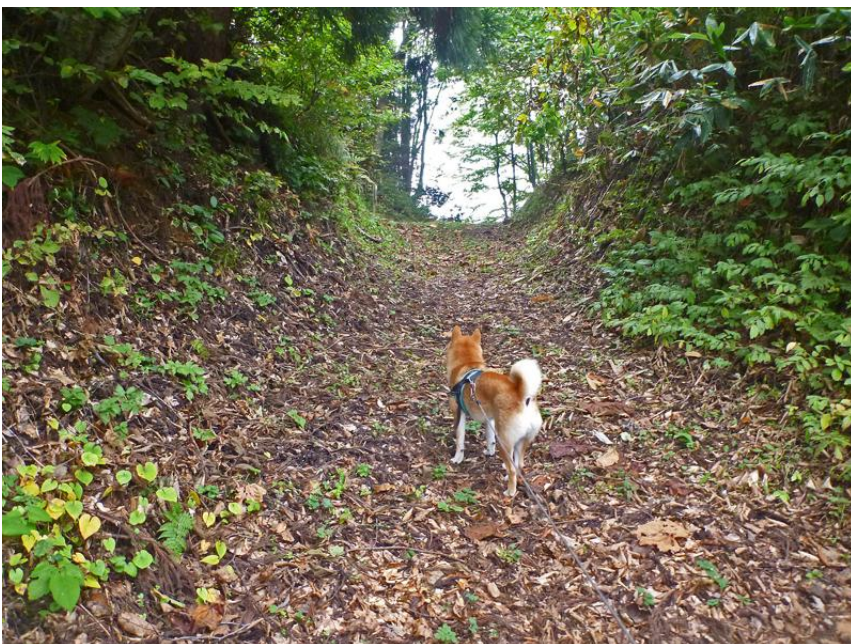
今回のテン場



集落の中の舗装道路を歩くうちに、とかちはバテ気味になってきた。この日2番目の難所の塞ノ神峠にさしかかったところで、「とかち」は道路にへたり込んで歩けなくなった。「さあ、頑張るぞ!」と言っても動かずに目を閉じてウトウトし始めた。山道を歩き始めて5時間、10kmは歩いた。どうやら限界のようなので、テン場に適した場所はないかを見渡した。こういうときは動物的勘が働き、テン場に良さそうな場所をすぐ見当つけた。そこは、少し道路を下った所の山田の傍で沢水も流れている絶好のテン場だった。

テント設営の傍らで、「とかち」はすぐに寝始めたが、死んだようにピクリともしないで寝ていた。しばらくして目を覚まし、水を沢山飲んだ。よほど疲れていたか、脱水症状気味だったとみえる。少し落ち着いてから夕食を食べた。「とかち」はいつものドッグフード、自分はラーメンに牛丼を、サルナシ酒を飲みながら食べた。西日が山の端へ消えた頃、軽トラが近づいてきた。私有地に無断でテントを張ったので怒られるのかと緊張したが、「野菜もってこようか」と優しく声をかけてくれた。「夕食は終わったし、荷物になるので気持ちだけいただきます」と言ったら、「なんもあげるものがなくてゴメンな」と言って帰って行った。「とかち」も全く吠えなかった。

暗くなったのでテントのなかに入って寝袋を用意したら、「とかち」がその上に乗って自分のものと言わんばかりの顔をしている。「これはオレのだ」と引っ張ると、両手でしっかりと押さえている。無理矢理チャック



を開けて中に入ろうとしたら「とかち」も入ってきた。窮屈なので外へ出そうとすると、甘噛みをしながら激しく抵抗し、しばらくバトルを楽しんだ。犬の寝相はすこぶる悪い。自分の頭のほうから足下まで移動しながら寝ている。その都度自分の体の上を乗り越えていく。そうはいうものの、寝ているときは体を自分にくっつけているところがかわいい。

塞ノ神峠

10時間の睡眠の後、テントの外に出ると、昨日の快晴が嘘のように、今にも降りそうな空模様だ。朝食の準備をしようと思ったら、遂に降ってきた。ひとまずテント

に避難して待機をしたが、「とかち」は外に出たがっている。「とかち」がいるので、テントの中ではバーナーは使えないので、行動食を朝食代わりに食べ、「とかち」も餌を食べた。しばらくして雨も止んだようなので、急いでテントを撤収して塞ノ神峠を目指した。

峠には、その向こうに、今まで経験したことのない世界が広がっているのでは、と期待させる魅力がある。塞ノ神峠はそんな雰囲気のある峠だ。「とかち」も元気を取り戻し、峠を一気に越えた。

田麦俣の手前で、また雨が降ってきた。これから行く予定の方向も厚い雲に覆われている。これより進むと一般道から離れて避難路の確保が難しくなる。ここで決断をしなければならぬ。折角の古道を雨の中歩くのは勿体ないので、次の機会にすることにして中止とした。迎えの車が来るまでの間、田麦俣の集落を隈無く歩いた。

なんと皮肉なことか、しばらくしたら晴れ間がでてきた。しかし、迎えの車も頼んだことだし、気持ちも萎えたので中止の決断は変わらなかった。



田麦俣の多層民家

田麦俣のシンボルの時計台

学生の頃、仙台から実家の遊佐まで自転車で帰った時があった。旧笹谷峠を越え、旧六十里越街道も越える240kmの距離だった。その当時は二つの峠ともほとんど砂利道だった。仙台を朝早く出発しても、六十里越街道は日が暮れていた。真っ暗な山道を不安に駆られて必死に自転車をこいで田麦俣にたどり着き、この時計台の灯りを見た時の安堵感は今でも忘れられない。その当時の田麦俣の集落は今より多かったが、夜遅くなればほとんどの家では電気を消すので、真っ暗闇になってしまうのだが、そんな中、この時計台の灯りはとてつもなく明るく見えた。中の時計は違うが、当時の時計台が今でもそのまま残っているのである。

山形県人にとっても、田麦俣という言葉の響きは、辺境の地という代名詞のようなものであったが、それ故、ここには独特の文化が芽生え、今では数少なくなった多層民家が数多く残っていた。50年前はほとんどが茅葺きの屋根で、日本の山村の集落の象徴のようなもので、「日本昔話」そのものだった。今は2棟しか残っていない。



廃校となった田麦俣小学校



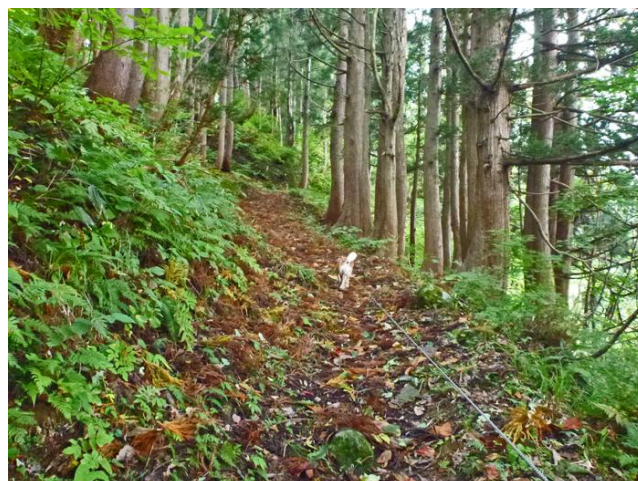
去年、天候悪化のため中断した六十里越街道の続きを歩いて、六十里越街道の主要部分の踏破を計画した。田麦俣から志津までの18kmを一泊二日の計画で、途中、適当な場所を捜してテントを張ることにして出発した。六十里越街道は1200年前から存在していたと言われているが、それ以前にも人々の往来はあったに違いない。正確な歴史的考察は専門家に任せるとして、1200年前の古道を歩いて見ることによって、当時の人間がどんなことを考え、行動していたかを垣間見ることができればと思って歩き始めた。

今回のスタート地点
舗装路はここから400mだけで、あとは完全山道

最初から急勾配の続く蟻腰坂には閉口したが、あとは快適な山道を「とかち」に引っ張られるようにして登り続けた。こんなに引っ張ったら体力を消耗し、去年のようにバテると困るので、「マテ！、ユックリ！」と、声のかけ通しだった。普段はおとなしい「とかち」が突如唸り声をあげ、前方を威嚇した。さてはクマでもいるのかと見通しの悪いカーブを曲がると、カメラを持った人間が一人いた。姿は見えなくても気配を感じていたのだ。その遙か前方には大勢のグループがいた。東京から来た20名ほどのツアーで、山船頭のガイドをつけていた。同じ場所で休憩をしたのだが、自分とほぼ同年代の人達は、「とかち」のことを「毛並みの良い犬だね」とか、「お利口な犬だね」と褒めるものだから、「とかち」も気分を良くして触られるままにしていた。

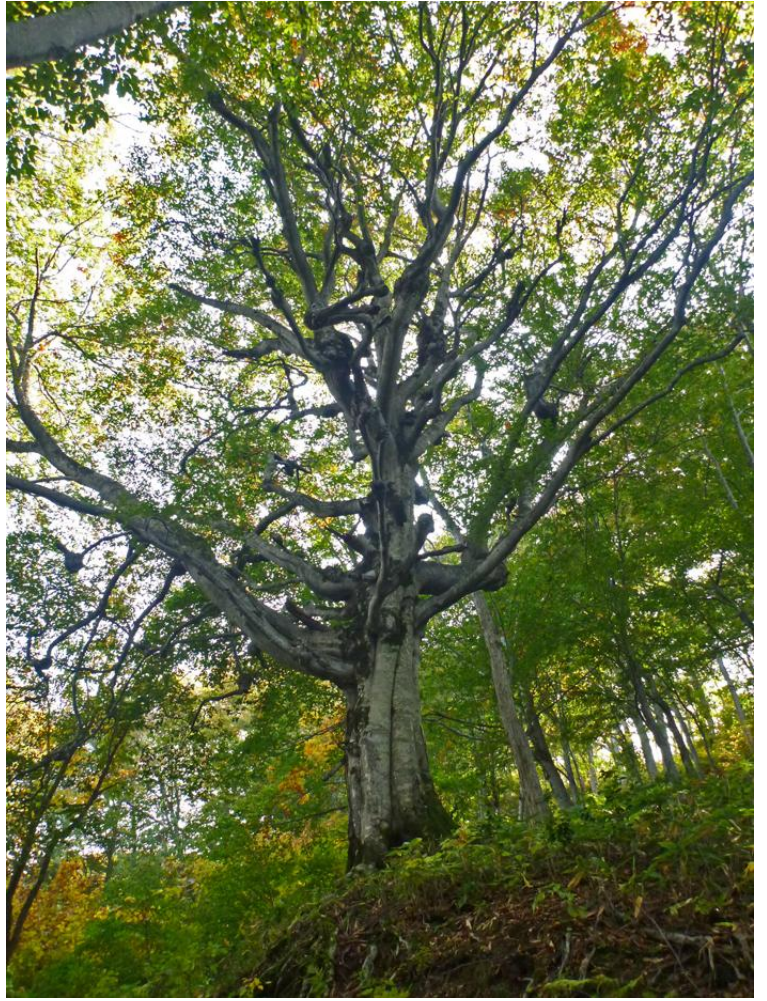


蟻腰坂





弘法茶屋跡



千手ブナ



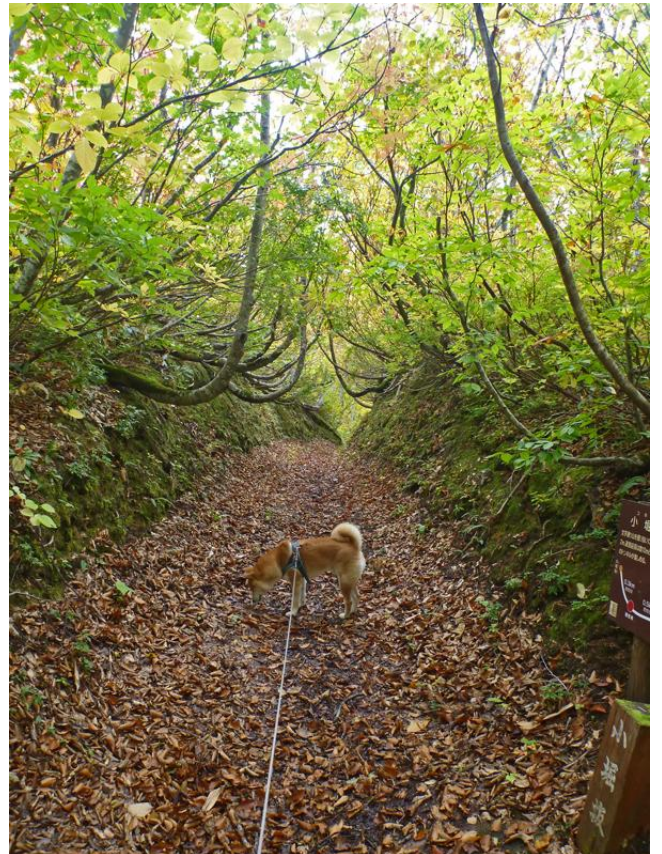
護摩壇石



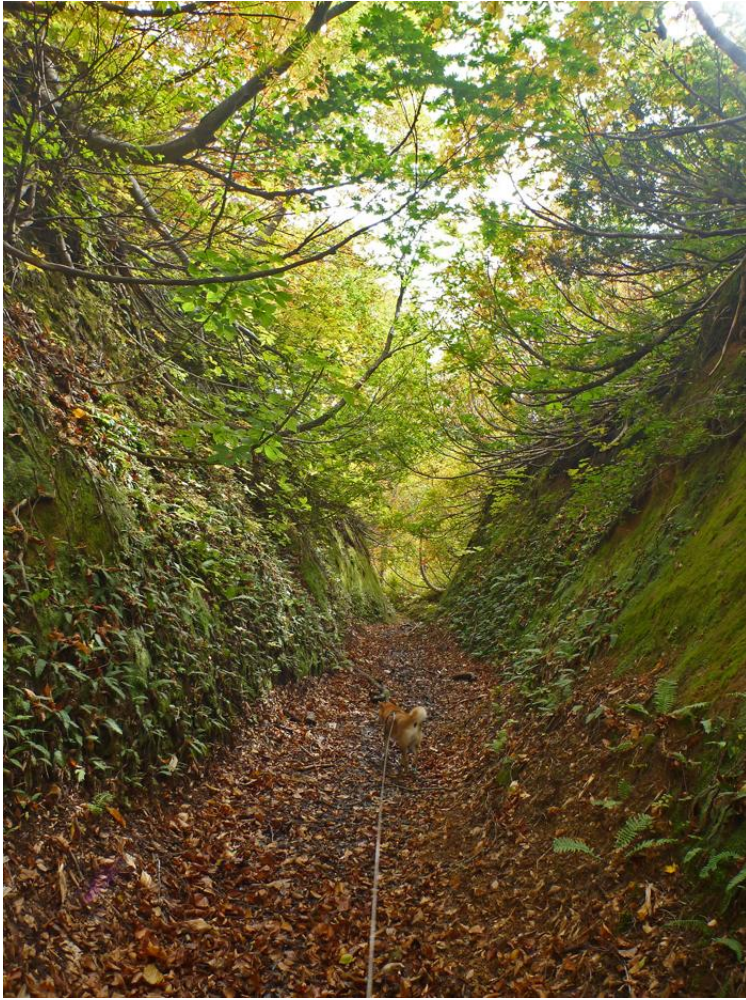
月山展望台 中央奥が月山で右端が湯殿山



気持ちの良い山道



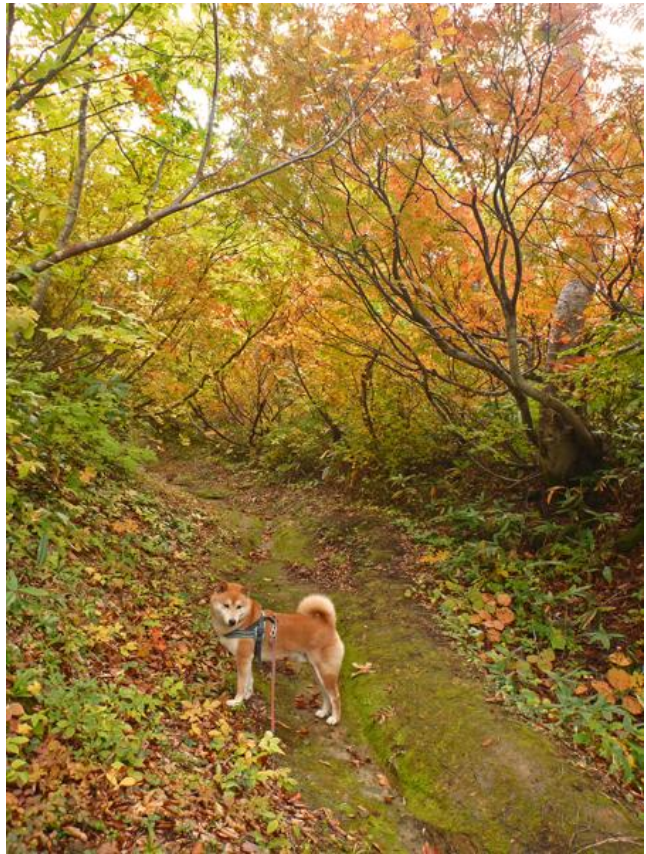
小堀抜



大掘抜



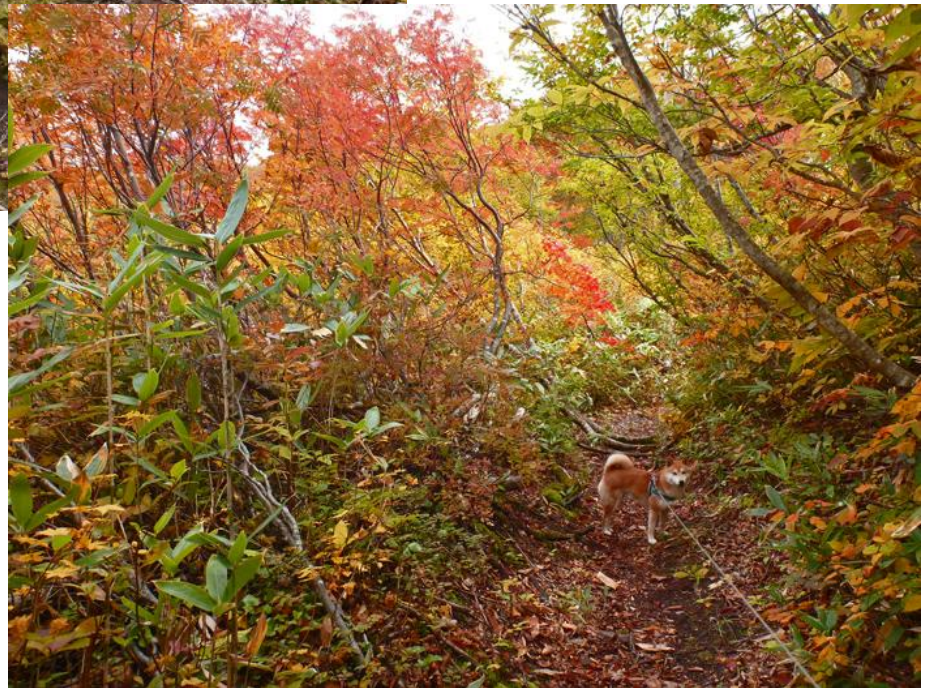
細越峠手前一里塚付近の急坂





一里塚

標高が高くなるにつれ、紅葉も鮮やかになる

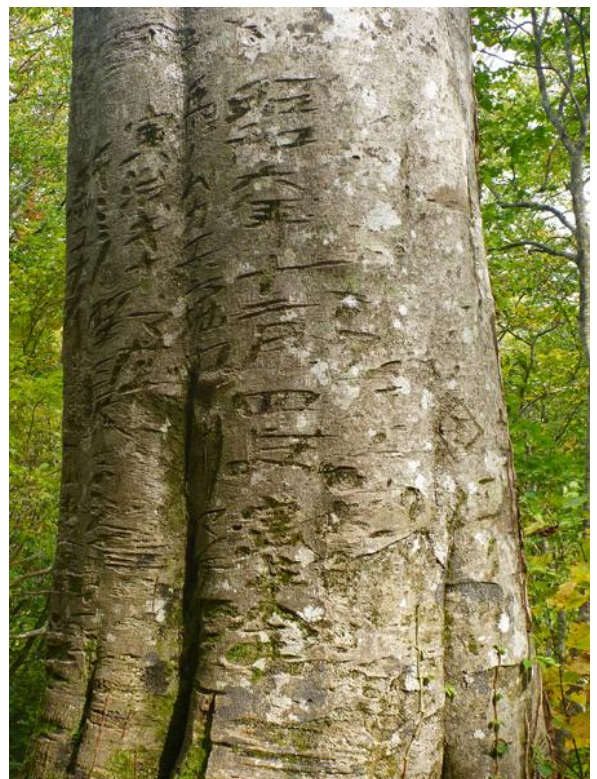
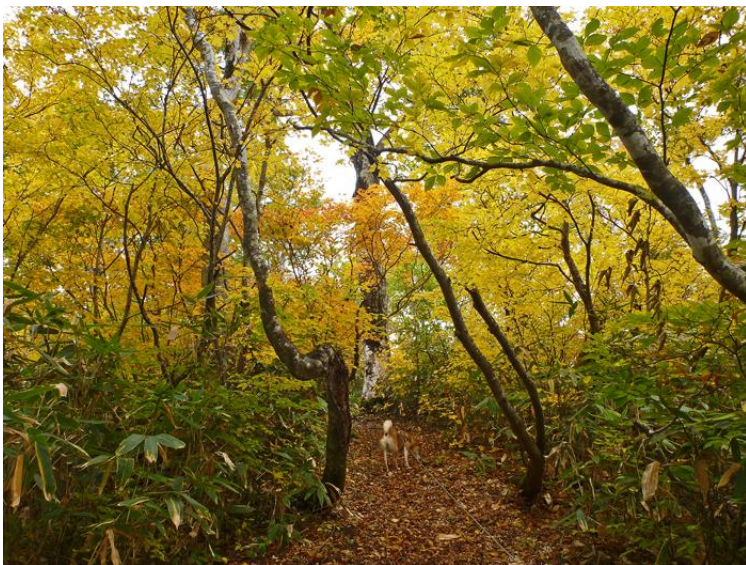


自分の高度計は、ガイドマップの高度とほぼ同じ高度を示してくれるので、現在地も把握できるし、これからの行動計画も立て易い。標高900mの細越峠手前から、見事な紅葉が楽しめるようになった。細越峠手前の一里塚には強く惹かれるものがあった。このコースは去年の松根からのコースと比べると、何カ所かの茶屋跡、護摩壇石、小掘抜、大掘抜、月山展望台などの史跡、見所が盛り沢山なので飽きない。細越峠を過ぎると、おいしい湧き水の水場が多くなり、「とかち」もその度に水を飲み、自分も同じ水を飲んだ。北海道の山の水場と違って、エキノコックスの心配はあまりないようだから、冷たい水を美味しく飲むことができた。

豊かなブナ林



湯殿山遙拝所より湯殿山山門



細越峠の急斜面を下りきったあたりのブナの巨木に刻まれた鉦目からは、昭和6年12月、新雪が90cmも降る中で、湯殿山側からの馬の迎えを待っている様子が読み取れる。恐らく背負えるだけの荷物を背負って細越峠を越えたものの、頼みの馬の迎えがこないことに対しての焦りと不安が生々しい。



六十里越街道の中で最良の「いっぱい清水」 旨い水！



笹小屋跡地



湯殿山碑

即身仏となってお坊さんが修行をした所





テントの傍でうたた寝をする「とかち」

今日のテン場 「龍ヶ池」



暮れなずむ木立



股間に入り込んで寝る「とかち」

そろそろ今晚のテン場を考えなければならない。「とかち」も元気そのものだし、明日の標高1140mの大岫峠越えを考えると、予定のテン場より先に行っていた方が良いのだが、明日の天気予報は雨で、所によっては雷雨となって強く降ると言っているの、最悪の場合を考えて、湯殿山有料道路をエスケープルートとし、あまり奥に入らない「龍ヶ池」に決めた。しかし、誤算だった。池の畔のテン場を想像していたが、湖面までは落差30m程のブッシュを降りなければならなかった。もう少し先にテン場を捜そうと思って歩こうとしたら、「今晚はここにテントを張るぞ」と言ってザックを下ろしたせいか、「とかち」は動かない。こんなこともあろうかと、水は手前の沢で3L確保してあったのでここにテントを張ることにした。案内板には龍が出そうな神秘的な池と書いてあるが、分かりやすく言えば薄気味悪い山中なのである。しかし、鬱蒼とした木立の下は少々の雨や夜露から守ってくれそうだ。暮れなずむ木立の向こうには、夕陽が反射して眩しく輝く「龍ヶ池」の白い湖面が見える。明るいうちに食事を済まそうと支度をしていると、「とかち」が座ったまま気持ち良さそうに舟を漕いでいた。今晚は、天然ブリの照り焼きに麻婆ナス丼、フカヒレスープを、天気に恵まれた今日の行程を振り返り、サルナシ酒を飲みながら満ち足りた気持ちになっていただいた。「とかち」もいつもの食事の時間より早いと一緒に食べ、暗くなったので6時半にはテントに入って寝ることにした。夜中に「とかち」が落ち着かない様子でテントの外に出ようとしている。そのうち、自分の手を咥えたり、前足で引っ張るような仕草をしたりし始めたので、テントの入口を開けると、すぐに外に出たと思ったら、ピチャピチャという音が聞こえてきた。自分も外に出てみると、「とかち」は夢中になって水を飲んでいて、余程、喉が渴いていたのだろうと思うと同時に、吠えたりしないで、自分を外に出せと意思表示したことに感心した。



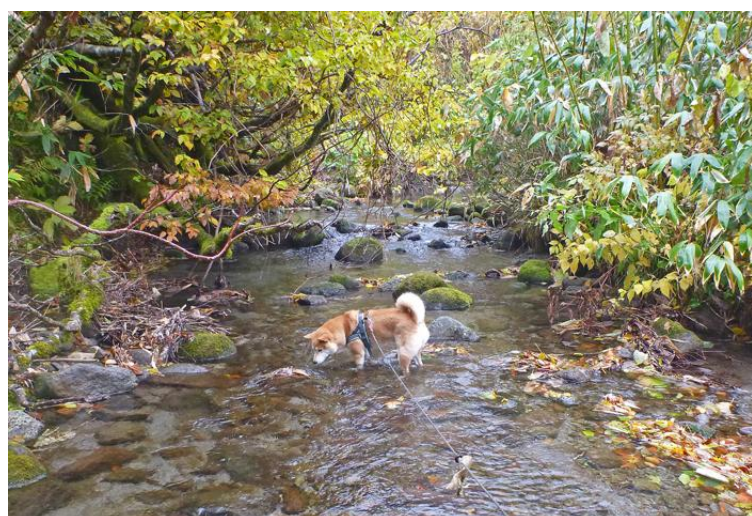
大岫峠への急坂の途中からの湯殿山と紅葉

翌朝、5時前に「とかち」に起こされたが、まだ暗い。ヘッドランプを着けて朝食の準備をしているうち、東の空が白々と明け始めてきた。心配された雨はまだ降っていないし、テン場が樹林の下だったので夜露にも濡れていないし、降らないうちにテントを撤収した。今日も朝から「とかち」は元気良く先に行く。歩き始めて間もなくして雨が降り始めた。大降りにはならないようなので雨具を着て続行することにしたが、念のため、志津の清水屋旅館のご主人に、雨が降った場合の田代沢の徒渉の危険を電話で確認したところ、「よほどの雨でないかぎり大丈夫だ」と言うことだったので、安心して先を急いだ。

雨池を過ぎたあたりから道は急に険しくなり、標高1140mの大岫峠を目指してドンドン高度を上げていった。「とかち」は全く怯むことなくリードを引っ張って先を行く。最上川水系と赤川水系の分水嶺であり、最上領と庄内領の境でもある大岫峠は、展望のきく見晴らしの良い峠だ。恐らく、ここを往来した古の人々も、この峠で大休憩しながら、この同じ景色を眺めたことだろう。狩りの獲物の量、商いの損得、追われての身、取り締まりの身等により、この雄大な景色も見え方は千差万別だったろうと思っていると、1200年が一気に蘇ってくるような想いに駆られた。



標高1140mの大岫峠 とかちも絶景をしばし眺める

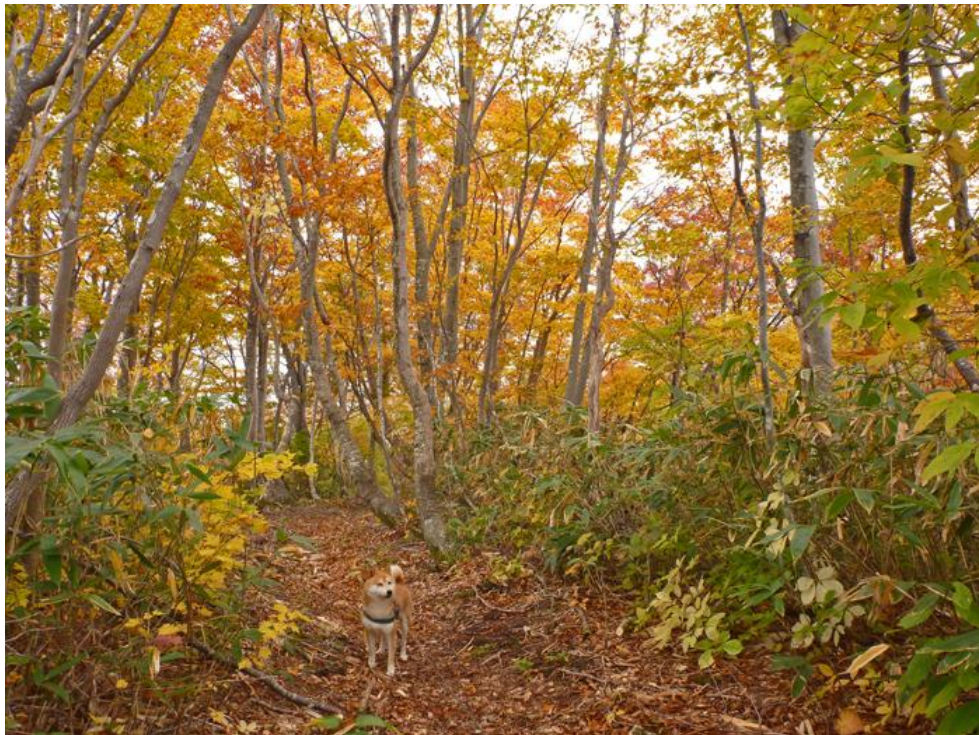


田代沢本流で水遊びに興ずる「とかち」

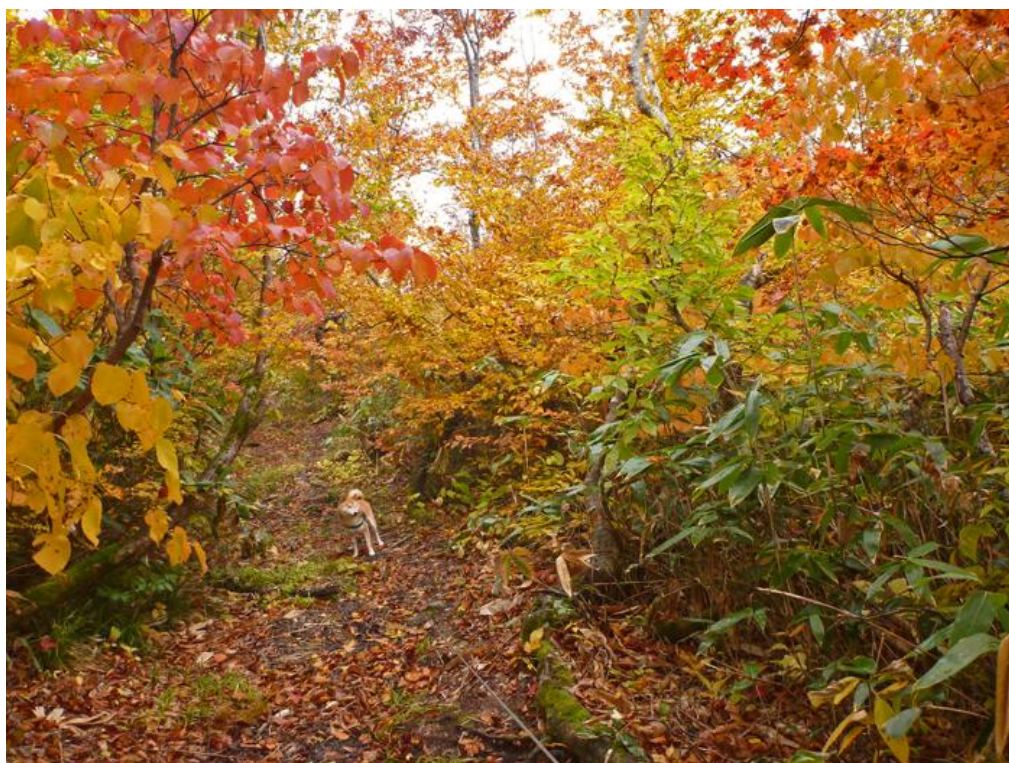


大岫峠から志津にかけて長い下りが続くが、これまでと雰囲気はかなり変わった。史跡名所の類いは無くなり、自然のままの、緩やかな勾配の歩きやすい探索路が続く。とってつけたような案内板が多いのよりは、このほうが抵抗がない。見所は自分で見つけれられるもので、人から教えられるものではない。

峠あたりは紅葉も終わっていたが、焼山尾根あたりは見事に色づいていた。写真を撮るたびに「とかち」を「マテ！」と言って止めていたら、景色の良い所に行くと、先に行く「とかち」は立ち止まって、「ココデトッタホウガイイヨ」と言わんばかりの顔つきで振り返るようになった。



立ち止まって振り返る「とかち」上下とも





焼山尾根からの眺望 遠くに月山の姥沢地区が望まれる



風雪の厳しさを物語るブナの樹形

予定よりかなり早めに志津に到着した。六十里越街道はもっと続くのだが、主要部分は歩いたので、ゴールは志津温泉清水屋旅館と決めていた。清水屋旅館の前には石碑群があり、ゴールに相応しい雰囲気があるからである。

清水屋旅館は、東北学院中高校の夏山スキー合宿で長年お世話になってきたところで、お陰で宿のご主人からは月山の豊かな恵みの話しなどを数多く聞くことができた。月山のことなら知らないことは無いのではと思われるほどだ。本当は下山してここに1泊し、キノコ料理を食べながら、六十里越街道踏破の余韻に浸りたかったが、残念ながら3連休ともあり満室だった。ここの温泉の浴槽からは、目の前の五色沼越しに月山まで眺められ、トレーニングが終わった後の風呂は最高だった。天気に左右される計画なので、早くから予約できないから致し方ない。

大岫峠から志津までの街道（登山道）は刈り払われて歩きやすかったが、なんと、清水屋のご主人が背中にチェンソーを背負いながら刈り払ったことを知り、計り知れない労力だったろうと驚き、感謝の念で一杯になった。

出迎えたご主人は、今年の紅葉の色はあまり良くないと言っていた。ブナの実が大豊作の年は、ブナの葉に栄養がいけないので小さいのと、色づいて間もなくの猛烈な風で落葉してしまったからだと言っていた。

六十里越街道を歩いた率直な思いは、「昔の人はよく歩いたものだ」ということだ。猛暑の夏も、極寒の冬もこの道しかなかったので、歩かざるを得なかったとは言え、今の人には無理だろう。恐らく、この「歩き」が当時の生活、文化の礎になっていたのだろうし、従って、思考の原点も「歩き」の尺度だったのではと思った。

志津温泉の石碑群

清水屋旅館の真ん前にあり、裏が五色沼



清水屋旅館のご主人の

出迎えを受けて無事ゴール



